

美作地域における地域創生に係る学生のフィールドワークモデルの構築に関する研究

社会福祉学科 武田英樹

はじめに

社会福祉士及び介護福祉士法において、「社会福祉士」とは「社会福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整その他の援助を行うことを業とする者をいう」と規定されている。近年の活動フィールドは「福祉」の分野に止まらず、「医療」「教育」「司法」「行政」「災害」「企業」など広がり続けている。間違いなく、地域に必要な不可欠なエッセンシャルワーカーであり、その業務は「相談援助」と表現されることが多い。

2020年、社会福祉士養成課程において、教育課程の見直しが行われ、業務について相談援助からソーシャルワークが用いられるようになった。その背景には2018年3月にとりまとめられた、社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会の報告書「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」¹⁾によって、「今後、地域共生社会の実現を推進し、新たな福祉ニーズに対応するため、ソーシャルワークの専門職としての役割を担って行ける実践能力を有する社会福祉士を養成する必要がある」との結論に至ったことがあげられる²⁾。本報告書で示されているソーシャルワーク機能は、「複合化・複雑化した課題を受け止める多機関の協働による包括的な相談支援体制を構築するために求められるソーシャルワークの機能」と「地域住民等が主体的に地域課題を把握し、解決を試みる体制を構築するために求められるソーシャルワークの機能」である。

本研究ではこのような地域共生社会の実現に向けた社会の変化とそれに伴う社会福祉士養成課程の変化を鑑み、多様な状況に対応できるジェネラリストソーシャルワーカーの養成に必要なスキルをどのように習得していくかに視点を置く。そして、「地域がキャンパス」と社会福祉学科が取り組んでいる活動のフィールドの一つ岡山県美作市の「上山集落」での活動の中での教育効果と教育モデルの構築を試みる。

I. 研究方法

研究対象は本学社会福祉学科自主ゼミグループ「上山コミュニティ実践研究会(以下、上山サークルと略す)」入会の学生、「特別演習Ⅰ」「特別演習Ⅱ」「特別演習Ⅲ」で筆者が担当する学生のうち、上山での活動に参加した者である。

1. 上山集落を活動拠点に置き、年間を通じて学生たちが集落を訪れ、地域行事や地域の独自

事業に参加する。

2. 住民の中から地域創生に取り組む実践者3名をコーディネーターに任命し、活動についての助言・指導を受ける。
3. グループワークも取り入れながら地域課題を分析するプログラムを構築していく。
4. 行事後の振り返りのレポートからキーワード抽出する。

実際のところ、2021年度の引き続きコロナ禍による大学からの緊急警報発令等により、急遽予定を中止せざるを得ない状況が重なった。よって単発での取り組みになったり、調査対象のメンバーが行事ごとに異なり、当初の目的とした年間での実践プログラムのモデルを構築するまでには至らなかった。

II. 対象学生たちの活動内容

前期期間の活動としては、4月には学生による自主ゼミサークルである上山サークルが1年生向け活動紹介を実施した。ここでは、サークルでの活動内容が伝わるようにパワーポイントでプレゼン資料を作成することを基本としている。5月には特別演習Ⅰ、Ⅱの学生での焚き火トークを実施した。学年の異なる学生同士で初めての宿泊研修を実施し、夜間に焚き火トークを実施した。6月には上山サークルが水路掃除に参加した。この行事は原則、地域住民全員参加によるもので、集落の行事を手伝う過程と終了後に一緒に昼食をとることで交流を図れる機会である。同付きには水路掃除当日は法政大学や立命館大学の学生たちも上山集落へ視察に来ており、学生同士交流もできた。午前中は、集落全員で行われる水路掃除に参加し、その後は法政大学学生とともにグループワークを行った。7月には現地コーディネーターを講師に招聘し、「上山集落における中山間地域活性化の取り組みについて」をテーマに勉強会を実施した。



後期期間の活動としては、10月に稲刈りに参加した。同月に上山サークルで上山にあるキャンプ場を活用し、現地コーディネーターを講師に、防災研修を実施した。枯れ木、落ち葉から火を起こす方法や火の管理などについて学んだ。その後、防災研修で起こした焚き火を囲んで焚き火トークを実施した。11月には上山サークルが収穫祭に参加し、模擬店販売などのスタッフとして住民

の手伝いを担った。12月には「特別演習Ⅲ」の履修学生を対象に上山集落が旅行会社と提携している展望台を視察し、その後、上山集落の大芦高原キャンプ場へ移動し、キャンプファイヤーコーナーにて焚き火トークを実施した。同月に「特演Ⅰ」の履修学生対象にお山のおうちえんを視察した。お山のおうちえんは、子ども自身の「～したい」から始まる遊びや、そこで育まれる主体性を大切にしている山の中の小さな学び舎であり、現在、幼稚部と小学部がある。自然を園庭に子どもたちとふれあい、最後にスタッフを囲んでのスーパービジョンを実施した。



表 1 活動内容(2022年度)

月	行事内容	対象学生	参加学生
4月	1年生向け活動紹介ならびにオリエンテーション	自主ゼミ	55名
5月	焚き火トーク	特演Ⅰ・Ⅱ	11名
6月	水路掃除	自主ゼミ	8名
	法政大学学生との交流会	自主ゼミ	8名
7月	上山学習会	自主ゼミ	17名
10月	稲刈り	自主ゼミ	10人
10月	防災研修&焚き火トーク	自主ゼミ	11名
11月	収穫祭	自主ゼミ	4名
12月	上山展望台視察	特演Ⅲ	10名
12月	焚き火トーク	特演Ⅲ	10名
12月	お山のおうちえん	特演Ⅰ	6名

表2 活動に対する感想

【稲刈りに対する学生の感想】

- ・ 地域の人たちの温かみに触れてコミュニティの大切さが実感できた。活動中も地域の人たちが絶えず話しかけてくれて楽しい時間でした。
- ・ 今回初めての上山でしたが地域の人たちがとてもアットホームで仲がいいと感じました。この関係性は日ごろから地域一丸となって水路掃除や田植えなどを行っている結果なんだということが理解できました。
- ・ おいしいお米が作られる背景にはいろんな苦勞が積み重ねられていることを実体験から知ることができました。次回の活動が楽しみです。
- ・ 今回初めて水路掃除などに参加して、初対面にもかかわらず、地域の人たちは優しく接してくれました。
- ・ コミュニティの絆や温かみを実感できた体験でした。

【お山のおうちえんに対する学生の感想】

- ・ 自分自身、幼稚園や小学校低学年の子ども達と密に関わる機会がこれまで無かったので、とても貴重な体験をさせていただきました。
- ・ 先生が児童の間に入って何かを進めたり、仲介をしたりするのではなく、児童同士で居り合いをつけて、問題の解決をしたり、遊び方を工夫したりと児童自身で考えて行動する力や自分達で妥協点を探す力がお山のおうちえんに通う中でついていくのではないかと感じました。
- ・ 子供達とすぐに打ち解けられたのは自分たちのコミュニケーション能力がある程度備わっているのはそうなのですが、子供たちもお山のおうちえんで育て、開放的にのびのびと成長しているため子供達自身もコミュニケーション能力がついていて打ち解けやすかったと思いました。
- ・ お山のおうちえんで育つ子供達はいい環境で過ごしているなと思いました。
- ・ 子供達から「聞いて聞いて」、「見て見て」、と引っ張られる事が多く、私たちのように外部から来た人らに、自分たちの魅力を見てもらおうという事はお山のおうちえんで過ごす子どもたちにとって良い刺激となっていて、そういうのも子供達の好奇心や創造力を伸ばしていく事ができるのだろうなと思いました
- ・ 私自身が幼少期はゲームばかりして遊んでいたため、初めは砂を触る事で少し嫌悪感を抱いてしまっていました。しかし、子ども達が積極的に遊びに誘ってくれたり、園内の案内をしてくれて、一緒に遊んでいると砂や虫を気にする事は一度も無く、自分でも驚きました。
- ・ 子ども達が教えてくれた遊びは大人になった私でも楽しいと感じて、私が子ども達と同じくらいの歳の頃にその遊びをしていたら今よりもっと楽しいと感じていたのだろうなと思いました。

- ・ おやつ後に1人ずつ1日の楽しかった事を発表しているところを見て、子ども達の積極性や主体性を大事にしている職員の姿勢を知ることができました。
- ・ 子どもたちは大人がいないところでも自由に遊んでいて、自分が幼稚園にいるときは先生の目が届かないところでは遊べなかったので羨ましさがありました。
- ・ 子どもたちが山の中に階段や足場などを自由に作っているからこそその発想力や遊び心などが高まっていくのだと感じました。
- ・ 子どもたちのありのままを大切に認め合うお山のおうちえんの魅力を感じることができました。
- ・ 施設には小学生1年生ぐらいまでの子供達が自然の中で独自の遊びを考えていたり、コミュニケーションを取っていました。
- ・ 私は小さい年頃の子供達に関わる経験があまり無かったのですが、子供達はとても明るく、積極的に関わって来てくれたため、すぐに打ち解けることができました。
- ・ 幼稚園の先生は児童の仲介役として関わっていくというイメージが強いですが、この園では子供達の主体性を生かすことを重点に置かれた関わり方をされていました。
- ・ 子供達の想像力や積極性など様々な可能性が見出されているのだと思いました。
- ・ 子ども達が自分達で遊びを考えたり、やりたい事を見つけ実践していく姿や、先生が子ども達の主体性を尊重している所に魅力を感じました。
- ・ 自然の中での遊びは柔軟な発想や想像力が培われ、ありのままの自分を表現できているのではないかと思います。
- ・ 自分自身、子どもたちと自然の中で時間を忘れて思い切り遊ぶことができ、懐かしさもありとても楽しかったです。

【焚き火トークに対する学生の感想】

- ・ 第一印象や現在の印象など、普段聞くことが出来ないことを聞くことができよかったです。
- ・ みんなから印象を言ってもらって、自分がどんな風に思われているのかも知ることができ、自分の強みについて再確認する事ができました。
- ・ 焚き火トークを通してメンバー同士の交流や話すきっかけにもなって良かったなと思いました。とても充実した時間になりました
- ・ 焚き火トークは、自分が気づかない部分や、友達が私の事をどう思っているのか知ることが出来た。
- ・ 人から感謝を伝えられると今まで頑張ってきたよかったと思えた。
- ・ 今、国試に向けて頑張っている時で、なかなか自己肯定感を高める機会がなかったので、いい機会になった。残り数ヶ月だが、みんなと国試に向け頑張りたい。そして、みんなと合格したいと思った。
- ・ みんなの印象やうれしいこと聞けて自己肯定感があがりました。国試まであと2ヶ月ぐらい

ですがこうやって休み休みしながらみんなで合格がんばろう。

- ・ 上山の住民の方々にも場所を提供してもらいありがとうございました。またなんかしましう。
- ・ 友達から普段の印象を聞くことがないので聞いてよかったし自己肯定感が上がりました。
- ・ 先生が考えてくださった感謝を伝えるのも普段みんなと話さない内容でみんなの心の内を知ることが出来てよかったです。この半日充実しました。
- ・ みんなからの印象を聞いて、良いこと言ってくれていたの、自己肯定感が上がりました。
- ・ 先生が出してくれたテーマは、改めてみんなに対する思いや感謝の気持ちに気づくことができ、とてもいい時間だったと思いました。
- ・ 色々な第一印象を持たれていたなと思いました。今の印象と第一印象だと違う印象を持つ人もいて、自分の印象を聞くことはないあまりないので新鮮でした。楽しかったです。
- ・ 今回の焚き火トークでは普段ならあまり言えない本音や感謝を伝えられる場となり、メンバーの発言からも感じることができました。
- ・ 相手を見て話したり、焚き火を見ながら、自分のことや相手のことを考えたり振り返ることができ、本音で話せることで自分の自己肯定感を高めることにも繋がりとても有意義な時間になりました。
- ・ 入学時の印象と今の印象を聞くことで、自己肯定感が上がり4年間を通して何かと成長できたのかなと感じました。
- ・ 普段あまり関わらない方の印象を知りまだ知らない一面を知ることができコミュニケーションの幅が広がったのかなと感じました。
- ・ これまで関わる機会がなかったメンバーたちとの間で、初めは少し「どーなるのだろう」という緊張していましたが、始めてみると、笑顔が沢山の楽しい時間を過ごすことができました。
- ・ 焚き火という久しぶりのデイキャンプ風な環境で対話する機会が出来てとても楽しかったです。
- ・ 普段一緒にいるみんなのことを改めて考えると気づかなかったことや知らなかった一面を知ることができました。自分自身も周りの友達のことたくさん知れて良かったです！

Ⅲ. 考察

2021年度における上山集落でみえてきたのは「〇〇+α」である。例えば、「伝統行事(祭事)の復活+集客イベント」、「古民家再生+カフェ起業・民泊などの起業」、「鳥獣対策+革製品開発」、「棚田再生+企業研究」、「農業+商品開発によるブランディング」、「雲海など自然+観光」、「キャンプ場再生+フェス」、「福祉+仕事+コミュニティ」等であった。このキーワードは地域発展の要素であり、ソーシャルワーカーが中山間地域で意識すべき視点となると考えた。今年度、引き続き、このキーワードを起点に上山集落での活動を振り返ると、これら中山間地域にある社会資源をソーシャルワークの学習ツールとして

も活用できることが明らかになってきた。

今回の行事においては、大芦高原キャンプ場を「キャンプ場＋防災研修」として位置づけてフィールドワークのプログラムに盛り込んだ。さらに、昨年度から防災研修に絡めて試行的に実施した焚き火トークについても、プログラムに盛り込んだが学生たちの振り返りの感想からは興味深いキーワードが抽出できた。そのキーワードは自己肯定感であった。その他にも自己覚知に繋がる文言が目立った。これらは、教室内でのグループワークと比較して、屋外や焚き火の効果がどの程度影響したのかは明確ではないが、コミュニケーションの設定に有効であることが示唆された。また、それぞれのプログラムにおいては、フィールドワークによる体験型プログラムに加え、スーパービジョンの機会を設定することで、自己の気づきや学びを整理することに繋がっていると考えられる。よってフィールドワークにはプラスでスーパービジョンの機会を設定することが必要である。

まとめ

本学では「地域がキャンパス」と課外活動を重視している。しかし、その活動は体験のみに偏ることによってソーシャルワークの専門職を養成することにはならない。地域共生社会において、ジェネラリストソーシャルワーカーを養成していく上で、地域へのフィールドワークにより、興味関心を実践現場にひきつけ、そこからソーシャルワークの理論へのフィードバックの機会を意図的に設定していくことが求められるであろう。

引用文献

- 1) 社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」報告書, 2018年3月.
- 2) 社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」2019年6月.